

瓶史國字解

一

79  
3868





門 39  
號 3858  
卷 1

袁

棟雲齋先生註

氏墨川  
不評觀

中

瓶史國字解

酒田大學  
昭和25.9.5  
購

郎

揆花畫會

全 部 十 三 冊  
合 本 十 一 冊

流

諸先生編合

千鍾房梓鐫

瓶史國字解序

瓶史國字解序  
函花亦有法矣。低昂俯仰長短  
疎密肥瘦正斜各得其宜而後  
可以觀焉。蘭之低不可使之昂。  
菊之仰不可使之俯。杜蘅之界  
不可使之高。臘梅之疎不可使  
之密。柳條之麓竹軟不可使之  
鬢。

瓶史國字解序



髮沙梅枝之橫斜不可使之挺直。牡丹芍藥之肥似揚太真不可使之瘦如魚玄機。又各有儻偶使令。賓主先後之不可犯焉。此乃造化自然之位置。而人不能用私意。而易之者也。袁石公之瓶史。蓋取法於此矣。前有利雲齋者。據

石公瓶史建函花法。自稱宏道流。大行于世。嘗刻瓶史於家。自為之叙。以授弟子。青雲齋少遊其門。親承口講。指畫云。桐谷鳥習子。從青雲齋而受其法。自號徠雲齋。善繼二先師之志。而鳴于時。近為瓶史國字解。



一篇而廣其義。我北山先生弁之  
題言以賞其志之厚。又曰北山  
先生徵余序。余雖未知其人未  
觀其書。北山先生既寓之。目冠  
之言。則博搜其故。泛辨其義。  
而有裨於函花者。流者不俟余  
言而明矣。吾復何言。余曾聞之。

陳雲齋。朝自沃水於瓶。自函花  
於瓶。夕坐其側。夜臥其下。對瓶  
玩花之間。喜躍狂舞。殊而不知肉  
味。非但癖於花。又狂於花者也。  
余行逢陳雲齋而見之。則吾  
詢其前身於日者。云若。不曰  
狂蝶癡蜂之獨化。則必曰石公。



之後身也

文化五年戊辰正月上元

鵬齋陳人興題

純史國字解序

古之好花者挿之頭上同其奇考其  
珍為傲觀者少皆然後之愛花者  
挿之鏡中添清寔靜室之雅趣大凡  
事不及古多矣唯此勝手古耳然而  
瓶有小大矮高之形花有疎密正斜之  
態挿之不一清新脫俗之法而寄雅



致則猥雜可醜也明袁中郎矯時  
 詩撰偽始唱詩之法新寫詩法於換  
 花述罷史於是乎挿花眼目豁然開  
 矣蓋近世鈍花者流多私為一家元  
 顏象徒不若練雲齋之祖師擊雪  
 高處純史建袁中郎一流挿花  
 之確乎有渊源者也遠矣是亦好

事士畫鈍史去雪集於其門梨雪  
 齋授其法於青雲齋練雲齋者  
 素重文門人也嘗以為鈍史彼邦  
 文字我邦晚世初學子以所不易驟  
 通乃著國字解若干卷使人得  
 輒讀之以此換花真尚雅致趣  
 不景仰其法者日多乎日思于其



師功于其道不出大守抑其人之  
厚也其志之深也其業之終絕亦  
當以此推知矣

文紀五竹石正月六日

北山山本信有撰



著堂并嘉義書

執史在中政不司史生之保  
也家史私藏之久矣且為祖傳  
及後不報遂竊探告可以為  
規據其得山國字授之以人使  
吹索一說而通曉凡彼之受



傳其規矩而已規矩能成其直也  
 吾師子曰大匠必以規矩學  
 志必以規矩行哉是之也  
 是以為教武之流古不遠也  
 界已遠矣聲如日舟機渡江河  
 也今茲陳雲為習子以家為  
 昔年一變編之字稱讀其之操  
 以子世中盡生能守規矩為  
 序而傳之詩曰不與不立由  
 憲今年為習子之規矩



文化五年庚辰林鐘之游

荷雲為室弟連德



明史卷二百八十八 列傳第一百七十六 勅修

文苑四

袁宏道字中郎公安人與兄宗道弟中道並有寸名時稱三袁宗道字伯修萬曆十四年會試第一授庶吉士進編修卒官右庶子泰昌時追錄光宗講官贈禮部右侍郎宏道年十六為諸生即結社城南為之長間為詩教古文有聲里中舉萬曆二十年進士歸家下帷墳書詩文主妙悟選吳縣知縣聽斷敏決公進鮮事與士大夫談說詩文以風雅自命已而解官去起授順天教授歷國子助教禮部主事謝病歸以起故官尋以清望擢吏部驗封主事改文選尋移考功員外郎立歲終考察群吏法言外官三歲一察京官六歲武官五歲此曹安得獨免疏上報可遂為定制遷督勳郎中後謝病歸數月卒云



梨雲齋傳

梨雲齋姓望月氏名義想俗稱調兵衛江戸人家世  
 住徐輪津之西享保七年壬寅正月生文化元甲子  
 歲九月死歲八十有三歲賦詩娛書又性自幼年嗜  
 插花常以膳瓶貯時花挿換之無倦人或謂之花癖  
 子嘗讀袁石公所作瓶史沈潛翫味久之每與同好  
 者談論嘆曰插花之有瓶史猶禮樂有春秋遂舉瓶  
 史一篇為之序表章其義申行其蓋以喻諸同與侶  
 自是以來知而好之者蕃衍都下施及他邦於本朝  
 瓶史開元祖也然而谷翫之為官舍之清賞市樓之  
 幽事云瓶史並序文一卷既梓之家藏  
 文化戊辰秋八月

青雲齋三田者京都湯島之産袁政九年丁巳歲正  
 月十又八日死少多挿花嗜好遂以此為深入之表  
 巾帟之執史と扱と随習之川人凡三子小笠原流の  
 後亦小扱と和朝席上の式乃花に奥儀を發明して之を  
 五書の袖と寄る川人小扱く爰小於て南流の技藝を子  
 弘石院にけりる重又女壘を築く光悦流乃沙魚と云る  
 為事と云及ゆ共と道と本郷に住す隱逸獨来して兼て  
 茶道を嗜ふ室中子相阿弥流乃金山と打く和清掃地  
 の素色を眺め好く酒と飲醉る法更に愛らる可憎早世  
 なる事と云子瓶史要述と著すと云も焼止す致す平常言  
 瓶史を國字を氣し挿花の道と云子弘く為事と傳致す  
 云凍雲齋と計と遠小國字と云瓶史と注解す尚其瓶花と



技中先所當即撰花の圖を以これと等引が為し門人多筆  
 種魚の瓶花の姿を寫し面直き盆面と送伴と教中郎  
 流棟花國會と名く又同好友士宮壺處乃花形と集併と  
 共子付せむとと諸見多々撰志國會云九卷と成瓶史國字解  
 四卷と全部く十二卷と著ゆ遠心子と得次ハ幸日と著  
 是係聊知學臺蒙乃輩瓶史として讀易の其瓶史  
 乃意に充る技藝の利助と爲身盡大家者乃爲子呈  
 す應之裁致は其海陋あると以て後弁申すとすこれ  
 文化五年歲在戊辰秋八月望日

嶺雲齋 清水溪城  
 峯雲齋 藤田致齋  
 同誌

# 瓶史國字解卷之一

陳雲齋 桐谷鳥習 註解

瓶史瓶ハ花瓶なり史ハ志  
 すと訓すそさかめ乃ことを  
 志るすとすふそそ是書  
 物の表紙と瓶史とつけ  
 こと史の字史記の史の字  
 子深き意味のあること  
 て挿花の枝の意味の深き  
 玉極をいふなり

夫幽人韻士屏絶聲  
 色其嗜好不得不鍾  
 於山水花竹

瓶史  
 明 袁宏道中郎 著  
 日本 梨雲齋望義想按  
 夫幽人韻士屏絶聲色其嗜好  
 不得不鍾於山水花竹

史幽人韻士屏絶聲色其嗜好とハ史とハ藝法としてものをい出すとハ其の字なり  
 幽人とハ隱者を指していふなり易の文字なり隱者とハ其の字なり其の字なり







利慾の計算子疲るあり。欲有之而有所不暇とハ前子云山水花竹の  
 の一を天下の世上一統の人ハ利慾のまひすしきありさまの塵沙のちりや  
 ほりの吹起るるまじのちりに居て目もくらまてまじ心もきん銀利慾の計算子  
 つれて山水のよき風景を見て色さびくをりて吃夜我がまのちてこの一を  
 その暇あつる所有といふことなり。故 幽人韻士得以衆間而踞 為  
 一日之有とハ衆間とハひま子ついでといふこと踞ハうづくまるといふ字まで踞とハ  
 いながらといふことなり。故 幽人韻士の隱者達ハひま子ついで踞していながら  
 山水花竹をわがまのちて一日の有と為ること得るとあり一日の有とハ有ハ  
 もつとむ字まで一日くとおすのことハおもえ其日くまとの一三盡すあり踞  
 とハ其山水の中子志づくの閑もやすんじているといふことなり

夫幽人韻士者處於  
 不爭之地而以一切  
 讓天下之人者也惟  
 夫山水花竹欲以讓  
 人而人未必樂受故

夫幽人韻士者處於不爭之地  
 而以一切讓天下之人者也惟  
 夫山水花竹欲以讓人而人未  
 必樂受故居之也安而踞之也

居之也安而踞之也  
 無禍

無禍  
 夫幽人韻士者處於不爭之地而  
 以一切讓天下之人者也

ハつねく世の人の不爭と云ふ所の地子處於といふことなり。以一切讓天下之人者  
 也とハ世の中的一切万事の物金銀銭寶田地田畑まふと又ハまきこふき名の名同  
 まてと云残らす世の中のことと世上の天下一統の人こは譲て世と通れて山奥さへ  
 引籠て居るといふことなり。惟夫山水花竹欲以讓人而人未必樂受とハ  
 前子云とく幽人韻士の隱者達ハ居る處さへ人の争ハぬ所子居て一切万事の  
 物と云つて天下の世の中の人子譲て人と物を争ハぬところ也今此山水花竹の自然  
 の風景の好とも人子譲與人とすれども世の人ハ元來利慾各同おさうり忙しくて此  
 山水花竹を受て我このまじて見て樂むことと未必ねかひ望ぬといふことなり。  
 樂の字茲子ハ上聲子てねかふと刻す。故 居之也安而踞之也無禍とハ世  
 の人ハ山水花竹の風景と受てこのむことと樂に及子幽人韻士達ハ世の人の樂  
 るところを我物子て樂に眺めて其中子居るゆ子安穩子て世の人こより悉く譲り  
 受て此中子踞居て遊べとも何の禍もさへといふことなり

嗟夫此隱者之事決

嗟夫此隱者之事決烈丈夫之

虎中園字解卷之一



烈丈夫之所為余生  
平企羨而不可必得  
者也幸而身居隱見  
之間世間可趨可爭  
者既不到余

所為余生平企羨而不可必得  
者也幸而身居隱見之間世間  
可趨可爭者既不到余

嘆息するの辞かり決烈とハ決断の義までこの思ひ限りの好といふの亦も  
むきかり烈ハ猛烈の義までむげき氣象と云ふり又文とハ大丈夫の人といふ  
こゝろり○余生平企羨而不可必得者也とハ余ハわれかり生平とハ  
常平生といふこと企とハ是をつまて高き所を三人とするの義まで今茲までハ  
我及ハぬ所を慕て羨と思ふことあり○此云意ハ嵯支五人隠士のごとき隠者  
の為事りて決烈なる大丈夫の入室のするところあり余平生は何卒隠者と  
かりて山水花竹をこゝろ樂み居て居てねがひてもあり我身分でハ而必得べ  
らざる者ありはも出来ぬことありと申郎先生自嘆息志する辞かりの幸而  
身居隱見之間世間可趨可爭者既不到余とハ隱ハ隱者のことと云ふを  
遁れ隠れざる人を見ハ去聲きてけんの夢ありあはるの義まで世間ををて

勢る人をいふなり表申郎今幸に隱者と定まり又世間ををりて務るといふも  
あらず西方の同小居て何の用さなくひまを身まどかり居るなりそれ故に世間趨  
もとむべき利於も争べき望も名聞のありも既に余が身の上一一向に辨すして何  
事も用向ハ来ぬ困へひまなりといふことあり

遂欲歌笠高巖濯纓  
流水又為卑官所絆  
僅有栽花蒔竹一事  
可以自樂

遂欲歌笠高巖濯纓流水又為  
卑官所絆僅有栽花蒔竹一事  
可以自樂

遂欲歌笠高巖濯纓流水とハ遂とハすくにといふこと歌笠高巖とハ前  
子云こゝろり入隱士のごとき隱者とかりて山水の字本と眺め樂まごきものと  
合羨とハ羨むの居り幸に隱者と平人との間居ることありこれバすくは隱者の趣  
とかりて山中一ゆきて笠を為巖とハ影て山水を眺め樂人とかり下履中纓  
流水とハ纓ハ冠の紐なり流水とハなる水あり冠の紐とハ山の間の谷河と云ふ  
澄ひ杯して風系的好と眺め樂人とかり此云意ハ是まで官位をかりて心勞してつれ  
し心の垢を山水の好風系は澄ひすかんといふことあり譬ハ今修禱子遊山をどにか











意此暫時快心事也。多粗以爲常。而忘山水之大樂。とハ意とハ嘆憤の  
ころなり。暫時とハ忘ぶくの間と云ふことあり。快心事とハころもちと云ふ  
くするといふことあり。粗以爲常とハふん子よく粗て常このころ爲といふ  
ことあり。而多忘山水之大樂とハ此大意ハ意と嘆て此この挿花と至極  
好き樂と云れども唯暫時忘ぶくの間心を快心するのこのこととて深き  
こととハあつた不ぬこの樂と粗て常のころとして彼函人韻士の樂む所  
の山水花竹の大樂の大とのを忘事おくれといふことあり  
右此二句の章ハ中郎先生挿花を祝の本心をあせり今挿花をとてあそ  
びこのむの輩鼠眼をつけて能く意味を察すべきものなり

○石公記之凡瓶中所用品目條列於後。與諸好事而貧者共焉。○石公  
とハ袁中郎先生の蹄なり記之とハ此挿花の書物を編り著すといふ  
ことあり。凡瓶中所用品目とハ凡而この挿花一切のむおき品この條目  
といふことあり。條列於後とハ其挿花品このむおきを條目して此来と妻  
書列著すといふことあり。諸好事而とハ好事とハものすきといふこととて凡而  
一切諸のむのすきといふこととて此貧者共焉とハされバ此様なる風  
流なる遊事とて此様なる風流を書物を書列するも敢る吾間の富貴と  
して名利と耽る人やまて學問才智ある人は思せんとハあらずあつらく挿

人まで武又學問もよく才智も経き人子てもまも風流も挿花茶湯  
などの技のむのすきある好事風流の人と共とて樂むるくさまんといふことあり  
△是をハ袁中郎先生の自序あり。序とハ此挿花のことと書物とせ  
し事の譯を自分で書述する也。これを自序といふあり  
△此序文のうちに挿花の道の大意を能く説盡しとるなり。終る何  
流に依らば挿花を祝ふ者ハ多し信す(き)の身一なり

一花目

一花目

燕京天氣嚴寒南中  
名花多不至即有至  
者率為巨璫大腕所  
有

燕京天氣嚴寒南中名花多不至  
即有至者率為巨璫大腕所  
有

燕京天氣嚴寒とハ燕京とハ明の國の京都なり。古戦國の時燕の都  
なり。今も燕京と稱するなり。即北京の事なり。北の國故至而寒國  
なり。故天氣嚴寒といふことあり。嚴寒ハきびきびと云ふことあり。南中  
名花多不至とハ南中とハ南東の國とて暖なる所あり



其暖ある園より字本の名亦又植本の数色と増り来れども多ハきく  
 らずとあり是ハ軒ていふ今日本まで伊豆園あり暖ある園中蘭の  
 ぐい橙柑柑子の数多く出生るあり房州多と暖ある園及水仙と拾別  
 早く出るあり扱又越後國信濃園多と寒園中水仙多ハ冬ハ香一橙柑  
 柑子懸ハ特行て裁ても花も固す美とこのら終ハ多く枯るあり然とも  
 蘭多とハ冬の園ハ宝へ入れて介抱すれハ生を保つかり其ごとくして  
 ごとき寒園までハ花さ、物すくさ一故ハ南の方の暖ある園より殊桂さ  
 どの影裁樹のさび色も来れども多く澤山ハ玉に似と云ことあり  
 ○即有玉者率為巨瑞大魄所有ハ即有玉者ハ前ハ去ことく南  
 中の暖き園より来るものすこハありと云ども率といふことハ巨瑞大魄  
 こめハ所ハ有とあり○大魄ハ百姓のこと巨瑞ハ官官の事宦官ハ天子  
 の御側をつとむる役人まで殊外權威強きものと云るべ一大魄巨瑞さ  
 富貴驕奢の人あり多く南中より名花玉れハ率て買取物一裁るゆゑ其家のまは  
 いぬといふことあり

儒生寒士無因得發  
 其幕不得不取其近

儒生寒士無因得發其幕不得  
 不取其近而易致者

而易致者

儒生寒士ハ儒生とハ儒者のことあり寒士ハ  
 貧窮ある士をいふあり茲ハ儒生寒士ハ中

郎先生昇下の詩あり○無因得發一發其幕不得不取其近而易  
 致者とハ其幕とハ幕ハまくといふ字までこれハ富貴の人の園や花壇ハ張蓋  
 幕のことあり發とハ其幕をあげひくといふこと此ハ此方とハの様ある  
 儒生寒士の貧あるものハ其富貴ある人や權威強き人の園や花壇ハ張  
 不幕をあげ教きて見ることを得る子何のよ一ことありもなるれハ見ること  
 其近き所を近くする花といふこと易致者とハ多近くして取易花と  
 見ることあり其多近く取易花を取らばといふことあり  
 是ハ此風流の文章子一燕京ハ北京寒園多ハ花ものすくさ一南中  
 暖ある園より玉名花ありといふこと率これハ巨瑞大魄の爲賞取れ此  
 方ごもの様を中郎ことき儒生寒士の交あるものハ其幕をあげて教  
 見ることあり其多近く取易花を取らばといふことあり  
 ことあり其多近く取易花を取らばといふことあり  
 ことあり其多近く取易花を取らばといふことあり

夫取花如取友山林奇逸之士



夫取花如取友山林  
奇逸之士族迷於豕  
鹿身蔽於豐草吾雖  
欲友之而不可得

族迷於豕鹿身蔽於豐草吾雖  
欲友之而不可得

山林奇逸之士と山林と山の木の立こころをえやをいふなり奇逸  
之士と八奇ハ世の中つねの人とハ違ひて氣象の勝れて珍しき人をいふ  
逸とハ隱色の義をいふこれも擧げらるること奇逸とハ人を譽るる辞なり  
士ハ其人をさしていふ奇逸の人といふこと奇逸とハ人前子去函人散士のるい  
まて山の林子引籠て居る隱者などのことと驚いていふ事なり  
○族迷於豕鹿身蔽豊草とハ族ハ親族の族なり  
るるハ前子去山林奇逸の士といふべき人たちの親類一族といふことなり  
豕鹿とハ豕ハいのことといふ字にて鹿ハ豕といふ字にてこ  
れも獸のまうのことなり○身蔽於豊草とハ身とハ其奇逸の士の  
ことをさしていふなり豊草とハ字深くむひ茂りたるをいふ故とハ字  
の深き中子むこれかくれ居ることをいふなり○吾雖欲友之而不可得

可憐とハ吾とハ中郎先生まづらるるをさして吾といふなり○去意ハ吾この山林奇  
逸の士といふべき人らうを友人とせんと欲といふとも而も濁へくはとかり  
此去意ハ愁る花を嗜人子望していふ事なるなり交花を取るといふも  
友人をこころゆるまゝとくともあり彼山林子びき籠り居る奇逸の士とい  
ふき隱者達を友人とておそびあつちんとすれども其隱者達の親しい  
一技ともいふべき人々皆山子むらり引籠居て其身豊草の草深く茂り  
たる中子蔽隠れておれぬなり因而これを友とせんと欲といふも而も濁へ  
くはとかり思ふまゝにハあゝぬといふこと奇逸とハ今豕や山子ある所の花を  
取んとおそむべきの亦や蔓草とかまきついで邪魔をかり又ハ字深き中  
にまげりかかれておれが好き花やうまひておれぬなりた様はむつりく取り  
悉き花を色こと令減して是れおれうまひ心勞して採ね又ハ入をけ  
てやれこれと騒ぎ取せることと風流ハあつて別却の物子して  
悪しきこと奇逸野山の花も通りぬる子好花のさし出たるをいふ道  
かりま子利て持たし又價貴き花を産出を澤山費して採り人子こせびく  
取るハいふこと奇逸又價貴き花を産出を澤山費して採り人子こせびく  
うすハ甚鄙俗なりといふく木風流玉極のことなり故に梨雲齋の執花  
の齋中子かく儀例曰花品高除凡勿務索難得と云



此章 実子 風雅の骨髓 不 透る あり 表 中 序の 意能く 味あべ

是故通邑大都之間  
時流所共標其目而  
指為雋士者吾亦欲  
友之取其近而易致也

是故通邑大都之間  
時流所共標其目而  
指為雋士者吾亦欲  
友之取其近而易致也

是故通邑大都之間とハ通邑とハ名の高き雋士を以てハ日本  
時流所共標其目而指為雋士者吾亦欲友之取其近而易致也  
此云意ハ前云所の山林奇逸の  
士ハおつゝ一々友人ヲあそびがごとし是故ハ通邑や大都などの人多き所にて  
時並の流行する人々皆共ニ標一因所を以て共ニ見テ指してあれが雋  
士の稱れ者なりと稱美する所の者を吾も亦其人をもこめちづきて是  
を友とせんを欲する是ハこれ其の近なりと云ふ也前云聖山ヲ深き中ニ隠れり  
まよハあれこれと迷てとりまき花や遠方よりとり寄せまごしてむづかし  
花ハ不風流なり凡俗の事なるがゆへ通邑や大都の間にて人々皆判  
て皆見て好む花を取て樂む事也これ其の近而易致を取ハかりといふなり  
余於諸花取其近而易致者入  
春為梅為海棠夏為牡丹為芍  
藥為石榴秋為木犀  
為蓮為菊冬為臘梅  
一室之内荀香何粉  
迭為賓客

是故通邑大都之間  
時流所共標其目而  
指為雋士者吾亦欲  
友之取其近而易致也

是故通邑大都之間  
時流所共標其目而  
指為雋士者吾亦欲  
友之取其近而易致也



於諸花とハ諸ハもろくと釋はなまろくの花はな子こ於おといふことなり取と其その近ちか
  
 而易えい致ち者しやとハ前まへも去きてとく其その子こ近ちかし取と易えい花はなをどるといふことなり
   
 春はる為な海うみ棠たう夏なつ為な牡丹ぼたん為な芍しやく藥やく為な石いし榴りゆう
  
 菊きく冬ふゆ為な臘ろう初はつとありこれ何なにれも挿さ花はなの上うへ品ひんありてまろ取と易えいきもの
   
 之の内うち昔むかし書かき出だしるあり取とけ様さまお好きす花はなを挿さるらて見みる時ときハ一いつ室しつ
  
 さとのことなり此この花はなを挿さし一いつ室しつ敷しきの内うちといふことなり為な實じつ客かくとハ實じつ
  
 ぶふと澤さわままれれびとつつあるままるるふふままおおろろふふ澤さわありて客かくをを費つふ
   
 義ぎあり客かくハ則すなはち客かくありささくく荀じゆん夷いとハ妾せう流りゆうといふ書かき物ぶつの客かく止しの篇へん曰い荀じゆん令れい
  
 君きみ五ご入に家け生せい處ち三さん日にち美みとあり荀じゆん冷れい君きみハ荀じゆん感かんととり入にて字あざなハ文ぶん若わと
   
 不ふ漢かんの侍しやく中ちゆうとある尚なほ書かき令れい守しゆり此この入に常じやう子こ醫い子し多たをを禁かとめ一いつゆゆ
  
 他たの家け子こゆゆきて坐まりていいる處ち帰かへり一いつおとと三さん日にち極ごくまま一いつとありるれどもこ
   
 此この入に常じやう子こ醫い子し多たをを禁かとめ一いつゆゆ
  
 此この入に常じやう子こ醫い子し多たをを禁かとめ一いつゆゆ
  
 尋たづ常じやうの入に子こ非ひさる取とぐくのごとく誓ちかていふあり何なに終しゆうとハ是こも客かく止しの篇へん
  
 何なに平へい叔しやくと去き入にて妾せう儀ぎ美み一いつききといふ人ひとささかく面めん珠しゆ更さらは白しろりり
   
 紹しやう明めい帝てい疑ぎ其その傳でん彩さい正せい夏なつ月げつ與よ批ひ湯たう蘇そ既き敷し大だい汗あせ出で以もつ朱しゆ衣い自みづか拭ぬぐ
  
 色いろ轉ま皎せう然ぜん此この人ひと坐まり美み一いつ色いろ白しろきこと白しろ粉こなをぬりぬるがごとく一いつ因よる

越この國くにの明めい帝ていこれこれを疑ぎハ夏なつの暑あつき日ひは盤ばん盪たう湯たう蘇そをを市しとるとると既き子こ敷し
  
 くらひ大だい汗あせを流ながし自みづか着ぬる所ところの朱しゆ衣いを拭ぬぐし一いつ面めん到いたり一いつ玉ぎよく一いつかり
   
 此このとあり是こも色いろの赤あかきをいふなりでハが一いつ其その人ひと品ひんの美みこととを譽ほむる也なり
  
 此このとありハ前まへも去きてとく花はなを皆みな入にてとくこれハ春はる夏なつ秋あき冬ふゆを常じやう子こまま
  
 花はなを挿さるら置おき一いつく其その橙だいだいのの花はな姿すがた木きのの美み一いつくて美みのあるあり花はなもあ
   
 りてひと間まの肉にく子このごとく美み一いつき入にてささがさるる送くわいは朱しゆ衣い實じつ客かくとあり
   
 此このとあり挿さるら始はじまま荀じゆん令れい美みある何なに平へい叔しやくが妾せう儀ぎを傳でんとるややは去きてとく
   
 其その意い味あじの深ふかき事ことあり一いつ筆ふで紙し子こ述じゆつかてきことあり

取と之の雖レ近チカ終ニ不レ敢テ濫ス及ニ凡サ卉カ就ニ
  
 使シ之レ花ハ寧ニ貼シ竹ハ栢ハ數ニ枝ニ以テ充レ之ニ
  
 雖レ無ニ老ト成ト人ト尚レ有ニ典ニ刑ニ

取と之の雖レ近チカ終ニ不レ敢テ濫ス及ニ凡サ卉カ就ニ
  
 取と之の雖レ近チカ終ニ不レ敢テ濫ス及ニ凡サ卉カ就ニ
  
 取と之の雖レ近チカ終ニ不レ敢テ濫ス及ニ凡サ卉カ就ニ
  
 取と之の雖レ近チカ終ニ不レ敢テ濫ス及ニ凡サ卉カ就ニ



とハうつりてとよふことあり凡そと凡ハ凡史の凡の字まつねるもの者と云  
こと亦ハ字も本も通小字子々草本をさして亦といふ是ハ尋常の  
字本といふことあり○此出意ハ其子迎子して取易花をとることあり  
易一と雖終つる子散て澄子してうつり常亦云一のやくさものと上物と  
ひらち取変るごとく一といふことを凡そ子不及といふなり○純使之レ花  
寧貼竹板敷枝以充之とハ純使之レ花とハ此花といふハ好上花のことあり  
つね亦云一の凡そやくさものとハ有てもやくさらず上花の好花子之ととも  
いふことあり寧とハつりつりといふてろかり竹拍とハ竹ハ竹かり拍ハ拍とつり  
て此拍の字ハ常磐のものなり今去びや老人をかれいふまこのてがらと云  
のるの皆慈名とあるべし今去比此拍の字をがらあり或ハやハ充ハ  
漲りかりがらハ拍この字かり敷枝とハ色く敷くの枝といふこと貼  
とハ字書子貼ハ貼置也と注してつりつりつりつりつりつりつりつりつり  
好き上花のかりて之とき時ハ竹拍のるの若葉母の花まきものも  
あつると押ておき花の更子せんといふことあり○雖も老成人高南典刑  
とハこれハ詩經といふ書物の蕩の篇子あることありて若の様を大徳の  
老成人ハ今ハ子といふともむら一の老成人が作りおられ典刑の法なる  
事ダ書物の中子尚残りておれハ今も其法なるを守り行ふよりいことハ

是りとよふことあり

○これ去意ハ花を取こと近くの敷易者をとるといへども終つて子散  
溢子して凡俗のやくさ花ととり交及さず就使子き上花かまけて之  
くても寧ろつり竹拍のるの上物の子きを花ハなくとも敷くの多きを  
貼して押してこれを花子充ん花のうり子せんといふことありこれか一の枝を  
老成人ハ今ハ子といふとも尚其典刑の法なる残あるといふものより花  
のやくさものを上花子取交うつり澄子して寧ろハ一き事ハせま一きかりと云ことあり

豈可使市井庸兒濁  
入賢社貽皇甫氏充  
隱之嗤哉

豈可使市井庸兒濁入賢社貽  
皇甫氏充隱之嗤哉

豈可使市井庸兒濁入賢社貽皇甫氏充隱之嗤哉とハ豈  
とハいづえそといふ義なり市井とハ市中町屋といふことあり庸兒とハつね  
かこのものごとくあり凡俗の入をさすといふことあり賢社とハ賢人達のなる  
といふことあり濁入せしめとハ濁ハ濁と入れハ入ると別とされいり起ると云  
ことあり皇甫氏充隱とハ晉書子桓去躬三已時猶去隱士求詩  
西朝隱士皇甫湜六世孫希之給其資用使隱居山林微作



著作郎便固歸下詔 性控時人謂之充隱 此六世の孫希之と云者をやひきりて出  
桓玄これを取て皇甫湜が六世の孫希之と云者をやひきりて出  
奥へかゝりて隠士ありとて終て著作郎とす 是より一  
て贖物なり因る其時の人充隱とて嘆けたり 充隱とハ充ハ  
澤ハ人子ありとておこまり

此六世ハ綴令花子之好き花少くとも凡修のやくぎ花を取  
いれて上花のちり挿交るハ堂市井の町屋の腐宅とて凡修入をや  
とひて賢社の入意のちりあく濁入ハむるうとてくありそれよりハ寧  
のこと子竹や柏の常盤木の中の土物を挿て岡子おむせることそ  
けれふまかり隠士ききとて皇甫氏希之が隠士のこときき  
しを時人子充隱とて嘆けたり 凡修のやくぎ花をことりき  
は挿て諸人の嘆をほむるを賂ことおられとりよことあり

二品第

漢宮三千趙娣第一 邢伊同幸望而泣下

二品第

漢宮三千趙娣第一 邢伊同幸

故知色之絶者蛾眉 未免俛首物之尤者 出乎其類

望而泣下故知色之絶者蛾眉 未免俛首物之尤者 出乎其類

品第ハ花の上品をおけて雅修の品をおけ次第の位を列するあり  
○漢宮三千趙娣第一 刑伊同幸 望而泣下とハ漢宮三千とハ漢の  
成帝の室め三子人あり一子三子人ながら皆美人なり趙娣ハ漢の成帝  
の皇后趙飛燕娣とて趙昭儀といひ一女子あり前漢書外戚傳曰娣  
身顯寵幸子餘幸といひり 兄弟をさぐる美人とて帝の寵愛を博しり  
而娣も勝れり故に漢宮三千人の中より趙娣第一といふあり 刑伊同  
幸 望而泣下とハ刑伊同幸とて二人共ハ美女とて是も漢宮三千  
人の中なるが 邢伊同幸とて同帝の寵愛をうけしとき 邢伊同幸も  
ひらく凡我子及美人ハある事と思し今如斯伊同幸人の寵せらるること  
疑しとて遂に伊同幸の室に泣て之を去り 妾も無復の美人なりけれハ大  
感嘆し泣を下しとていふことあり 是も今此事をかりもちゆることハ  
花の上品の正しきものと凡修のものをおけておんとて皆花を美人とて  
とて女の美悉あるを枕ことぞとせり ○ 知色之絶者蛾眉 俛首



俊首 物之充者出乎其類とハ色之絶者とハ色のすべれとるものハ  
といふことなり 娥眉とハかひこ山の眉を以て美人の眉子と云ふなり 詩經  
見たり 采芣芣之 俊首 とハ俊首とハ首をさげて降仕するをいふなり  
此去意ハ漢の玄女三子人の美人の中より一ハ趙婕妤 邢伊いられ  
も美人されども伊又ハ邢又人より勝たり 故 我知女色の絶とる  
ものハ刑又人のごとき娥眉ともいふべき女をいふも又其上の美人ありて  
未俊首して降参すること免ず物之充者すべれとるものも事其類  
のうちよりぬけ出ることを知りとる花もそのとわり子て好が中子も  
多其其上の上花ありとるちへ登きことなり

將使傾城與眾姬同 輦吉士與凡才並駕 誰之罪哉

將使傾城與眾姬同 輦吉士與凡才並駕 誰之罪哉

傾城とハ美人の猶子して漢書李夫人傳子之と云ふなり 眾姬ハ尋常の  
凡才ハ尋常の依の愚人をいふ輦ハのりものことなり

此去意ハ前子云く美人の上子も絶とる美人ありて免角俊首一閑は  
すること免ず將子珠を傾る社の美人と眾姬の尋常の女と同一輦子  
載又吉士のよき賢人と凡才の愚人と駕を並べおめんことをするハ誰が罪  
哉これ即吉士といふ様か上品の雅花を徒に眾姬や凡才の愚人の様を  
やぐ花と秘を同一或ハ同一臺へ登くこととするハ誰が罪哉これ  
則稱る人の罪なりといふことなり

梅以重葉綠萼玉牒百  
葉細梅為上海棠以西  
府紫錦為上牡丹以  
黃樓子綠蝴蝶西瓜  
穰大紅舞青猊為上  
芍藥以冠群芳御衣黃  
寶粧成為上榴花深  
紅重臺為上蓮花碧

梅以重葉綠萼玉牒百葉細梅  
為上海棠以西府紫錦為上牡丹  
以黃樓子綠蝴蝶西瓜穰大  
紅舞青猊為上芍藥以冠群芳  
御衣黃寶粧成為上榴花深紅  
重臺為上蓮花碧臺錦邊為上



臺錦邊為上木犀毬  
子早黃為上菊以諸  
色鶴翎西施剪絨為  
上蠟梅馨口香為上

木犀毬子早黃為上菊以諸色  
鶴翎西施剪絨為上蠟梅馨口  
香為上

○重葉梅 花鏡曰重葉花頭甚豐千葉用如小白蓮

これ八重の白大輪あり

○綠萼梅 花鏡曰凡梅附帶皆綠紫此獨純綠

これ八重の梅あり

和俗誤てきりかく梅といふ萼多小枝も多し單瓣あり子葉あり單瓣の  
もの八重を結ぶ子葉のもの八重く妻を結ぶ

○玉階梅 花鏡曰花頭大而赤紅色甚妍可愛

これ八重の紅あり

紅梅和漢通名藥頭紅而用后淡紅色者 和俗未用紅といふこれあり

○百葉細梅 花鏡曰本名黃香梅花小而心瓣極多

遵生八牋四時花紀曰梅七種尋常紅白之外有五種如綠萼蒂  
純綠而花多亦不多得 有照水梅花開朵向中者子瓣白梅名

玉階梅有單瓣紅梅有俚樹梅成墨梅皆奇品也種々可觀

○海棠西府 遵生八牋四時花紀曰海棠花七種有淡紅色如珠紅有本  
瓜絲紅有西府有刺海棠二種一紫一白有垂絲海

○海棠紫錦 棠以絲為甚云

○海棠西府紫錦共未詳 花鏡曰有西府海棠一種未言其形狀

々按海棠花色白淡紅帶一萼花紅白相交有深紅有紅色少色

淺者和俗曰杜子美海棠色濃者曰南東海棠皆花下垂也すて  
上に向ふ割り一種花下垂するものあり垂絲海棠といふ色深紅即集

解之絲海棠といふこれあり

西府の名のこありて未其形狀を考へば紫錦ハ東何の書にも見えず

遵生八牋子刺海棠二種一紫一白とあり恐くハ此紫多し人うるれども  
今日本ハ紫白とも見えず只前子ハ杜子美海棠と南東海棠と此

二種上品あり

○牡丹黃樓子







日本市仲子多あり其の辨きもの離きもの二種あり藥子用るハ研き者  
を上品とす食子用るハ研きくを上品とす、まゝ一種其の白きものあり  
集解子水晶石榴これあり和名云々凡爾美を結小樹ハ單瓣ありこれ  
を美くろと云ふ花の莖長く其の如く五つに分れて深紅單瓣の花開  
花散て莖葉を成す是河渭深紅莖葉あり榴の上品也云々つべ  
別子花さくろと云ふものあり紅白淡紅三種子瓣花大なり其を結ハす満  
耳く淡色花品いやくく一物あり花子甚嬌小なり中華ハ黄花の  
者ありと云ふ日本ハ赤一帯別子火石榴三種和名朝鮮さくろ、姫さくろ  
海石榴と目物なり小本より葉花葉とも小なり色紅白粉紅三種あり  
甚佳あり可愛

蓮花碧産

花鏡曰白瓣上有翠點房内復細綠葉出  
これハ云花子葉の點ありて房内子復緑の葉を袖ふるあり

蓮花錦邊

花鏡曰白花每瓣邊上有一緑紅暈或黃暈云々  
これへりとりのことあり

木犀隼子

遵生八牋四時花記曰木樨花四種あり

木犀早黄

金黃花白花黃花結子四季花惟金種為最葉邊ハ鋸齒而  
紋麗者其花多甚云々

菊諸色

隼子早黄特淨

菊鶴翎

花鏡曰子葉參差五尖云々

菊西施

花鏡曰多葉嫩黃色云々

菊剪絨

諸色剪絨二品未詳

菊種家甚多日本尚年々種家増長す依間通名のけんどきく加まろきく  
ふむむてきく、ていじるま、せんさんかき、まがきく、これとふきく皆上品あり

蠟梅馨口香

綱目子蠟梅 釋名黃梅 時珍曰此物本非梅類因其與  
梅同 時多又相近 色似蜜蠟 故得此名

集解子時珍曰蠟梅小樹叢枝尖葉種凡三種以子種出木經接者  
臘月并小花而葉淡名物蠟梅種接而花冰開時含口者名馨口梅  
花香而葉濃色深黃如紫檀者名檀多梅最佳結實如蜜鈴樹皮浸水  
藥性味辛平無毒 一名壽友 細珠  
和名くらむめ 菊系むめ 今らむめ通名あり



一名九英梅 品字箋 一名荷花梅 相珠

後水尾帝の時於て朝鮮より貢す其以前ハヨクハめておきものあり尤和産  
かり種子を傳へて之よりハ多し種子ノ下す能治す又條を挿し能  
活す葉長大而先尖り沙ありて季冬梅花ニ同種ニ花開淡黄色ニ  
して光澤あり蠟色なり細き葩九瓣中ニ紫の小なる葩あり香氣強  
九瓣あるがゆへニ品字箋ニ九英梅の名あり色淡黄なるがゆへニ集解ニ  
狗蠟梅の名あり集解ニ檀香梅とあるハ銀梅の上品なるなり和名梅と  
唐蠟梅といふ花深黄子一葩五瓣梅花のそと 葉紫をば一凡而蠟梅  
花ハ下葉するものあり又葉は梅よりハ檀香梅と同物なり集解の説ハ檀香  
檀香梅も花規て每かれども半開ニハ十分不開す含口なり此五瓣の者聲は  
多かり蠟梅の最上品なり今日日本ニハ此五瓣の者と九瓣の者と二品の外ハ  
諸花皆名品寒士齋  
中理不得悉致而余  
獨叙此數種者要以  
判斷群非不欲使常

諸花皆名品寒士齋中理不得  
悉致而余獨叙此數種者要以  
判斷群非不欲使常

閨監質襍諸奇卉之間耳

諸奇卉之間耳

諸花皆名品寒士齋中理不得悉致  
とハ諸花とハ諸ハもろくといふ字  
子てハもろく一切の花といふこと皆名品とハ前ニ去るべき花をとりしかきざ  
其外ハ一切諸の花子何ニ寄す皆名花上品ありといふことあり寒士齋中  
ニハ寒士といハ前ニ去ること貧乏なるものといふことあり但ニこの多かるものといふ  
ことハ今此邦ニハ世俗の身持不埒子随弱子一葉職のつとめ疎く世  
間ニ疎まれて貧乏子一困窮するもの影ニハあらず此寒士といハ諸  
度六丈のやうニ大身子てハかく知行も少く後固も軽くして僅子小身者と  
いふ義あり齋中ニハ家の内といふこと其花を挿す小坐敷のうち也  
理としてハ理子木いてといふこと不得悉致とハ其挿す上品の名花ども  
と悉くいふ澤山ニ挿するごとハあらずといふことあり而余獨叙此  
數種者要以判斷群非とハ余ハわれなり叙此數種とハ叙するハ叙記す  
るといふことあり此様ニ上品の名花を數の種を余獨品用して著製ぬる  
ものハ何故ぞといふことあり要はハ要とハさきぎてといふことさきぎてもつて  
いふことあり羣非とハ羣ハむろがらといふ字花ハかきざりりの花といふ  
ことあり也とハ羣花といふことあり判斷とハハもの多きを考へ分る



ことあり其色くのむくる花の美悪を考へざるごとかり。不敬使下  
 常園鑑賞 襟 諸奇卉之間 身は常園鑑賞と八つ柄の巾着の中は  
 居る妻まで通例の美女のこをかりこれハ凡而皆花を美人と云ふはこれハ  
 つねにその称くぬ花といふことありされども凡俗のやき花ハおらず上花  
 されどもふん側子存りて称くなきもの子ごとくある奇奇とハ  
 前子書つねなる花のち上花の中までまじり格別子稱くき花とも之  
 其格別子ぬけたる花を奇奇といふ称花なり但今和俗時ある花の  
 あやきものを持来りて珍花とてとてやす是依物の好所子て風雅  
 とハいふべからず凡而時をぬものハあやしくまらういふものあり此奇奇花  
 とハ其時盛りのものよりて譬ハ春二月梅盛ハ梅花澤山の中より其類  
 をぬけたる極上品上花よりて外子類のなき名花を珍花といふあり或ハ九月  
 菊の盛り其影をもぬけ外子なき名花を珍花とも好花ともいふべきあり然る  
 時盛りのものぐちりて上品名花を撰て用るることあり不敬使襟身とハ  
 襟ハ雜の字は同じ字よりまらるることあり此意ハ前子云く四季とも子  
 いろくの諸花名品珍花なりといふも我等ごとき小身ものよりて寒上の齋  
 中の小笠敷ハ取入るることありおびおせず理かり悉く致すことを得が  
 るあり而も余物は教種を書かハく叙記する子細ハ何故ぞといふ

要さきつて以羣毒の盛の多寡を判断して考へて常園の鑑賞の  
 不新常位側子居る稱くぬ上花ともを奇奇の格別の珍花の間  
 はハ襟一あることをバ敬せざるがゆへ身といふことあり

夫一字之褒榮於華  
 衮今以蓋官之董狐  
 定華林之春秋安得  
 不嚴且慎哉孔子曰  
 其義則丘竊取之矣

夫一字之褒榮於華衮今以蓋  
 官之董狐定華林之春秋安得  
 不嚴且慎哉孔子曰其義則丘  
 竊取之矣

夫一字之褒榮於華衮とハ夫一字之褒とハこれハ春秋經といふ書物  
 子あることあり春秋經といふ孔子の編まはる書物とハ文中一字づつと  
 ちつて褒貶せられざるあり致し一字の褒と書くるあり榮於華衮とハ華ハ  
 光華の義より立派なることといふとち衮とハ衮ハ天子の禮服とて九章の  
 服なり衮の字巻るといふとち衮とて龍の容を織出るとる御  
 服なり華衮とハ光華ある衮服といふことあり。今ハ蓋官之董狐定



華<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>美<sup>ミ</sup>秋<sup>キウ</sup>とハ<sup>ハ</sup>莖<sup>シ</sup>宮<sup>キウ</sup>とハ<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>掛<sup>カ</sup>り<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>役<sup>ヤク</sup>人<sup>ジン</sup>あり<sup>ハ</sup>董<sup>トウ</sup>瓶<sup>ペイ</sup>ハ<sup>ハ</sup>能<sup>ネ</sup>く<sup>ハ</sup>人<sup>ジン</sup>の<sup>ノ</sup>吾<sup>ガ</sup>意<sup>イ</sup>を<sup>ヲ</sup>池<sup>チ</sup>と<sup>シ</sup>て  
 少<sup>シ</sup>也<sup>ヤ</sup>私<sup>シ</sup>の<sup>ノ</sup>遊<sup>ユ</sup>り<sup>ノ</sup>こと<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>書<sup>シ</sup>池<sup>チ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>攻<sup>コウ</sup>ま<sup>ハ</sup>孔子<sup>コウジ</sup>も<sup>モ</sup>董<sup>トウ</sup>瓶<sup>ペイ</sup>ハ<sup>ハ</sup>右<sup>ウ</sup>の<sup>ノ</sup>良<sup>リョウ</sup>史<sup>シ</sup>あり<sup>ハ</sup>之<sup>ノ</sup>褒<sup>ホウ</sup>ら<sup>レ</sup>れ<sup>ル</sup>  
 今<sup>イマ</sup>花<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>善<sup>ゼン</sup>意<sup>イ</sup>を<sup>ヲ</sup>判<sup>ハ</sup>断<sup>ダン</sup>して<sup>ハ</sup>池<sup>チ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>叙<sup>ギョ</sup>入<sup>ニツ</sup>す<sup>ル</sup>こと<sup>ヲ</sup>あり<sup>ハ</sup>○<sup>○</sup>毋<sup>ム</sup>得<sup>トク</sup>不<sup>フ</sup>嚴<sup>エン</sup>且<sup>ツ</sup>慎<sup>シ</sup>裁<sup>サイ</sup>と<sup>ハ</sup>  
 毋<sup>ム</sup>之<sup>ノ</sup>ハ<sup>ハ</sup>相<sup>ソウ</sup>か<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>嚴<sup>エン</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>嚴<sup>エン</sup>審<sup>シ</sup>す<sup>ル</sup>こと<sup>ヲ</sup>あり<sup>ハ</sup>○<sup>○</sup>是<sup>レ</sup>ハ<sup>ハ</sup>意<sup>イ</sup>ハ<sup>ハ</sup>善<sup>ゼン</sup>秋<sup>キウ</sup>經<sup>キョウ</sup>一<sup>イツ</sup>字<sup>ジ</sup>  
 の<sup>ノ</sup>褒<sup>ホウ</sup>小<sup>コウ</sup>與<sup>ユ</sup>れ<sup>バ</sup>未<sup>メイ</sup>代<sup>ダイ</sup>名<sup>メイ</sup>を<sup>ヲ</sup>揚<sup>ヨウ</sup>る<sup>ル</sup>ゆ<sup>ハ</sup>天<sup>テン</sup>子<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>華<sup>ハ</sup>衰<sup>スイ</sup>の<sup>ノ</sup>服<sup>フク</sup>を<sup>ヲ</sup>衣<sup>イ</sup>する<sup>ル</sup>より<sup>モ</sup>華<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>  
 あり<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>今<sup>イマ</sup>吾<sup>ガ</sup>意<sup>イ</sup>董<sup>トウ</sup>瓶<sup>ペイ</sup>の<sup>ノ</sup>花<sup>ハ</sup>役<sup>ヤク</sup>人<sup>ジン</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>董<sup>トウ</sup>瓶<sup>ペイ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>孫<sup>ソン</sup>子<sup>シ</sup>能<sup>ネ</sup>く<sup>ハ</sup>花<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>善<sup>ゼン</sup>意<sup>イ</sup>を<sup>ヲ</sup>判<sup>ハ</sup>  
 断<sup>ダン</sup>して<sup>ハ</sup>考<sup>コウ</sup>て<sup>ハ</sup>以<sup>イ</sup>花<sup>ハ</sup>井<sup>ケイ</sup>の<sup>ノ</sup>中<sup>チュウ</sup>の<sup>ノ</sup>善<sup>ゼン</sup>秋<sup>キウ</sup>經<sup>キョウ</sup>の<sup>ノ</sup>褒<sup>ホウ</sup>貶<sup>ヘン</sup>の<sup>ノ</sup>法<sup>ホウ</sup>を<sup>ヲ</sup>定<sup>テイ</sup>まり<sup>ハ</sup>然<sup>シ</sup>ハ<sup>ハ</sup>當<sup>トウ</sup>か<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>嚴<sup>エン</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>  
 一<sup>イツ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>正<sup>テイ</sup>法<sup>ホウ</sup>なる<sup>ル</sup>こと<sup>ヲ</sup>を<sup>シ</sup>滑<sup>クワ</sup>武<sup>ブ</sup>必<sup>ヒツ</sup>花<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>善<sup>ゼン</sup>意<sup>イ</sup>を<sup>ヲ</sup>能<sup>ネ</sup>く<sup>ハ</sup>分<sup>ブン</sup>了<sup>リョウ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>孔子<sup>コウジ</sup>曰<sup>イフ</sup>其<sup>キ</sup>義<sup>イ</sup>則<sup>スレバ</sup>立<sup>リツ</sup>籍<sup>セキ</sup>  
 取<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>美<sup>ミ</sup>と<sup>ハ</sup>丘<sup>キウ</sup>ハ<sup>ハ</sup>孔子<sup>コウジ</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>メイ</sup>也<sup>ヤ</sup>此<sup>コノ</sup>法<sup>ホウ</sup>ハ<sup>ハ</sup>孟子<sup>孟子</sup>の<sup>ノ</sup>離<sup>リ</sup>婁<sup>ロウ</sup>の<sup>ノ</sup>篇<sup>ヘン</sup>子<sup>シ</sup>見<sup>ミ</sup>て<sup>ハ</sup>一<sup>イツ</sup>字<sup>ジ</sup>を<sup>ヲ</sup>以<sup>イ</sup>て<sup>ハ</sup>右<sup>ウ</sup>今<sup>イマ</sup>天<sup>テン</sup>下<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>人<sup>ジン</sup>を  
 經<sup>キョウ</sup>ハ<sup>ハ</sup>元<sup>ゲン</sup>魯<sup>ロ</sup>國<sup>クニ</sup>の<sup>ノ</sup>池<sup>チ</sup>據<sup>コ</sup>あり<sup>ハ</sup>一<sup>イツ</sup>字<sup>ジ</sup>孔子<sup>コウジ</sup>の<sup>ノ</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>一<sup>イツ</sup>字<sup>ジ</sup>の<sup>ノ</sup>褒<sup>ホウ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>右<sup>ウ</sup>今<sup>イマ</sup>天<sup>テン</sup>下<sup>カ</sup>の<sup>ノ</sup>人<sup>ジン</sup>を  
 賞<sup>ショウ</sup>罰<sup>バツ</sup>せ<sup>レ</sup>れ<sup>ハ</sup>攻<sup>コウ</sup>其<sup>キ</sup>義<sup>イ</sup>を<sup>ヲ</sup>立<sup>リツ</sup>る<sup>ル</sup>所<sup>トコロ</sup>ハ<sup>ハ</sup>則<sup>スレバ</sup>立<sup>リツ</sup>籍<sup>セキ</sup>ハ<sup>ハ</sup>吾<sup>ガ</sup>料<sup>リョウ</sup>簡<sup>ケン</sup>を<sup>ヲ</sup>以<sup>イ</sup>て<sup>ハ</sup>取<sup>ク</sup>之<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>今<sup>イマ</sup>法<sup>ホウ</sup>  
 此<sup>コノ</sup>法<sup>ホウ</sup>を<sup>ヲ</sup>刻<sup>キツ</sup>意<sup>イ</sup>ハ<sup>ハ</sup>孔子<sup>コウジ</sup>も<sup>モ</sup>善<sup>ゼン</sup>秋<sup>キウ</sup>經<sup>キョウ</sup>一<sup>イツ</sup>字<sup>ジ</sup>の<sup>ノ</sup>褒<sup>ホウ</sup>自<sup>ジ</sup>分<sup>ブン</sup>の<sup>ノ</sup>簡<sup>ケン</sup>を<sup>ヲ</sup>以<sup>イ</sup>て<sup>ハ</sup>義<sup>イ</sup>を<sup>ヲ</sup>取<sup>ク</sup>て<sup>ハ</sup>賞<sup>ショウ</sup>罰<sup>バツ</sup>せ<sup>レ</sup>る<sup>ル</sup>  
 一<sup>イツ</sup>字<sup>ジ</sup>表<sup>ヒョウ</sup>中<sup>チュウ</sup>郎<sup>ロウ</sup>も<sup>モ</sup>亦<sup>オク</sup>花<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>善<sup>ゼン</sup>意<sup>イ</sup>を<sup>ヲ</sup>判<sup>ハ</sup>断<sup>ダン</sup>す<sup>ル</sup>こと<sup>ヲ</sup>あり<sup>ハ</sup>若<sup>ニシ</sup>簡<sup>ケン</sup>を<sup>ヲ</sup>以<sup>イ</sup>て<sup>ハ</sup>す<sup>ル</sup>こと<sup>ヲ</sup>あり<sup>ハ</sup>○<sup>○</sup>也<sup>ヤ</sup>

瓶史國字解卷之一 終



